

外来種から桜を守れ

日高 雄太 (佐藤 航紀)

1. はじめに

近年、グローバル化が進んでいる中、問題視されるようになったのは外来種による問題である。奈良県では外来種であるクビアカツヤカミキリによって深刻な被害が出ている。この被害は日本を代表とする花である桜を食害するという問題である。このような問題は奈良県だけに限らず日本全国に広がっている。桜は春の風物詩であり、日本になくはならない存在である。私たちは桜をこのクビアカツヤカミキリから守り、被害を拡大させないために、この虫について調べ、そして多くの人に知ってもらいたいと思い、探究を始めた。



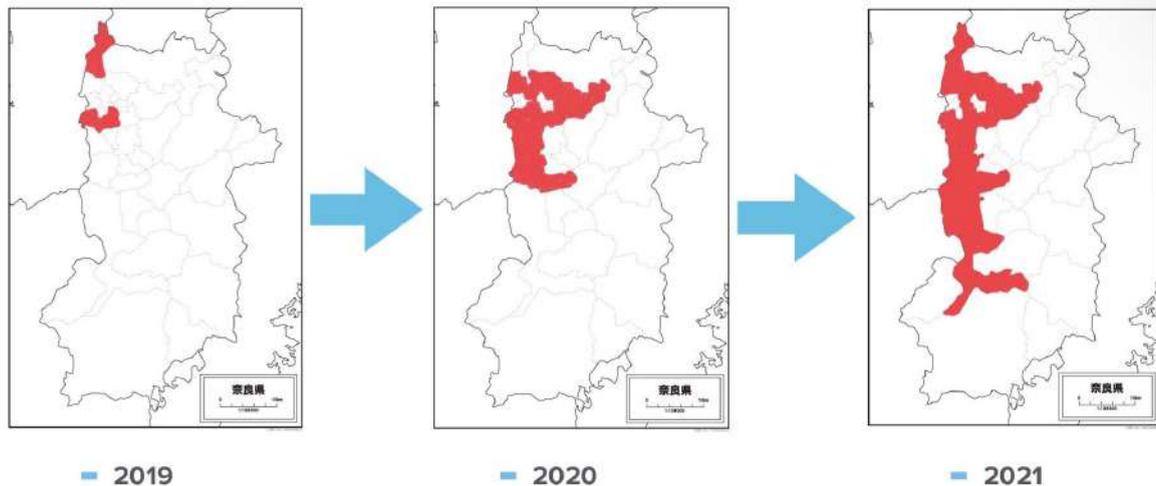
「クビアカツヤカミキリ (Aromia bungii)」

・体長2~4cm 特徴は名前の通り首元が赤く、体に光沢がありそして繁殖能力がとても高い。

2. 序論

クビアカツヤカミキリ(*Aromia Bungii*)は、2011年に日本への侵入が確認された外来種のカミキリムシであり、2018年1月に特定外来生物に指定された。特定外来生物とは明治時代以降に日本に入り込んだ外来生物の中で、農林水産業、人の生命・身体、生態系へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがある生物の中から、外来生物法に基づき指定された生物(生きているものに限られ、卵、種子、再生可能な器官も含まれる)である(環境省より)。特定外来生物に指定された生物は輸入、飼養や運搬、野外に放つことは法律で禁止されており、見つけたその場で駆除する必要がある。

クビアカツヤカミキリの自然分布は、中国、モンゴル、朝鮮半島、台湾およびベトナムである。クビアカツヤカミキリがどのようにして日本に侵入してきたかは不明だが、輸入木材や包材などの資材に紛れて日本に入ってきた可能性が高い。クビアカツヤカミキリの産卵期は5月下旬~8月下旬であり、一度の産卵で平均約350個、最大1,000個以上産卵する個体もいる。クビアカツヤカミキリは日本を代表とするサクラやウメ、モモ、カキの木などのバラ科の木を食害する。繁殖力がとても高く、早期発見早期対策が必須である。奈良県においては、たった2年で資料1に示す地域に広がっていることが分かる(資料1)



資料1

3. 本論

1. クビアカツヤカミキリ調査の実態について

2021年8月4日、奈良県御所市にある九品寺で確認されたクビアカツヤカミキリに食害された木の対処を見学した。そこでは奈良県庁の職員の方々が対処方法をレクチャーしてくださいました。寄生した木からクビアカツヤカミキリを他の木に移動させないために寄生された木にネットを被せた。またクビアカツヤカミキリの幼虫を駆除するための薬剤を木に注入した。寄生された木の対処は非常に時間がかかるものであり、真夏の炎天下で作業するのは厳しいものであると感じた。

また、平城宮跡で「平城宮跡サポートネットワーク緑の保全部」の方に具体的にどのような対策や取り組みをしていらっしゃるのか教えてもらった。

2021年現在、奈良県奈良市では4ヶ所にクビアカツヤカミキリの重要監視地点が登録されていた。

2. 秋篠川での調査について

私たちは、本校の付近にある秋篠川の桜並木を、「秋篠川源流を愛し育てる会」という地域の団体の方々と一緒に調査を行った。秋篠川の桜並木は1.3kmで総数154本のサクラの木々がある。調査では健康な木と比べ、葉が少なくないか、木に割れ目がないか、木からキノコが生えていないか、サクラの木からフラスという幼虫のフンと木屑が混ざったものが出ていないか、またヨコヅナサシガメ(写真2)などのクビアカツヤカミキリの幼虫を食べてくれる益虫である肉食系の虫が木にいるか、などの調査を行った。これらの調査は、木々の根本から人間の目線の高さで確認できる範囲でおこなった。

我々はこれまでに計3回調査を行った。調査結果は、表に示す。1度目の調査は2021年10月に行った。その調査では154本中144本が健康な個体だった。衰弱した個体は10本でそのうち8本にヨコヅナサシガメが確認できた。2度目の調査は2021年11月に行い、健康な個体は139本で、衰弱した個体は15本だった。また、そのうち11本にヨコヅナサシガメが確認できた。3度目の調査は2022年6月に行った。この調査では健康な個体と衰弱した個体は共に77本で、衰弱した木のうち1本にヨコヅナサシガメが確認できた。3回目の調査では衰弱した木が多く確認できた。計3回の通してクビアカツヤカミキリは確認はできなかった。



写真1(左)「フラス」幼虫のフンと木くずが混ざったもの。木々の根本から、人間の目線の高さほどの高さで確認出来る。

写真2(右)「ヨコヅナサシガメ」肉食の昆虫であり、クビアカツヤカミキリの幼虫などを捕食する。

(表)調査結果

	健康	衰弱	健康・虫	衰弱・虫
10月	144	10	2	8
11月	139	15	4	11
6月	77	77	0	1

3. 日本森林学会での発表について

私たちは一般社団法人「日本森林学会」が主催する「第9回高校生ポスター発表」で発表した。その時はクビアカツヤカミキリの活動期間外であったため、クビアカツヤカミキリを駆除するだけでなく、共生する方法を探究していた。しかし、なかなか良い考えがまとまらず、大学や研究機関の専門家の方に意見を頂こうと試みた。すると多くの方に意見や質問をいただき、多くの考え方を知り、視点が広がった。いただいた意見では、「生物との共生を考えることは大事ではあるが、現実的には厳しい」「花を見ることが人間に絶対に必要なことだと仮定すると、駆除することは仕方がない行為だとみなせる」などの意見があった。私たちが理想としている「外来生物との共生」は難しいものであり、私たちがこれから向き合っていくべき重要な課題だと改めて感じた。

4. 結論

クビアカツヤカミキリを見つけた場合、逃がさずにその場で捕殺し、見つけた地域の区市町村(環境担当窓口)に報告するつもりである。しかし侵入してきたクビアカツヤカミキリを駆除するという対応だけでは、その場しのぎの対応であり、根本的な問題の解決には至っていない。そこで私たちはもっと根本的なところに視点を向けた。それは、クビアカツヤカミキリなどの「外来種による深刻な被害」や「外来種の多くの命を奪っているという現状」を多くの人に発信、そして理解してもらう事により、社会全体が「日本に外来種を絶対に持ち込まない」という風潮になることである。これから私たちはこの深刻な現状を多くの人々に伝え、知ってもらうことが大切であると考えた。

5. おわりに

私はこの探究を高校生活を通して続けてきて、生き物を殺すという行動の重大さを知ることができた。探究を始めたばかりに読んだ「外来種の気持ち」という本を通して駆除される側の気持ちも知ることができた。初めは正直、外来種は殺して当たり前という考えをしていたけれど、外来種でも命があるわけで、その命を奪うことは正当な事なのかを考えられるようになった。またこの駆除するということは外来種だからという理由だけでなく、僕たちが桜を見たいがために駆除をするということも理由にある。これは1年生の時に取り組んだパーム油とボルネオの問題と繋がる場所があると思う。人の欲望で命を奪うということの傲慢さや自分が当たり前に思っていた事は、たくさんの犠牲や命の上にあるということも意識して、日々を過ごせるようになった。

6. 参考文献

奈良県ホームページ「奈良県クビアカツヤカミキリについて」

<https://www.pref.nara.jp/53306.htm>

東京都環境局「クビアカツヤカミキリの被害が発生・拡大しています！」

https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/animals_plants/400100a20191204115758336.html

加賀谷 悦子「クビアカツヤカミキリがなぜ脅威になったのか」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsk/89/0/89_2/_article/-char/ja/